

女性作家と「カフェー」の時代

——新出資料・山田順子の葉書から考える

大木 志門

一 新出資料・山田順子の葉書とその翻刻

このたび、一九二六（大正一五）年より数年間にわたる徳田秋聲との恋愛事件（いわゆる「順子事件」）で知られる女性作家・山田順子の未公開の葉書を三枚入手した。一九三三（昭和八）年前後に作家・劇作家の生田葵に宛てた葉書が二枚と、戦後の一九五二（昭和二七）年に時事新報社の社会部長であった今井欣三郎に宛てた葉書が一枚である。この時期の順子はすでに秋聲と訣別しており、これらの葉書は内容的に秋聲研究に直接寄与するものではない。また最初の二枚は生田葵宛であるが特に執筆や出版に関わる内容ではないため、文学資料といつてよいかさえ躊躇するような葉書である。

しかし、これまでほとんど研究対象となつてこなかつた山田順子の伝記的空白を埋める内容であることと、また順子のように文壇の中央を離れた女性がどのように「文学」の周辺で活動を行っていたかを示すという意味で広義の文学資料とも考えられるた

め、この場を借りてその紹介と意味づけを行つてみたい。なお、葉書はいずれも当時「カフェー」や「バー」と呼ばれた、特に関東大震災後に銀座を中心とした繁華街、歓楽街で急増した場所から出されており、そのような戦前の都市風俗の様相を検証する文化史的な価値も有するのではないかと考えている。

まずは以下にその葉書三枚の概要と翻刻を掲げる（翻刻中に□となつている箇所は推定）。

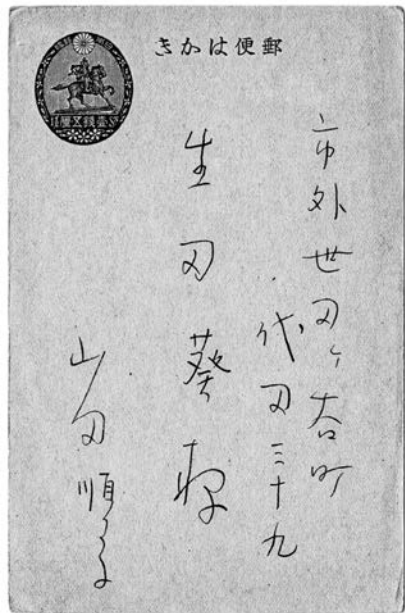
① 生田葵宛山田順子葉書（官製郵便葉書 消印なし 昭和七、八年頃推定）

表面（図版①）

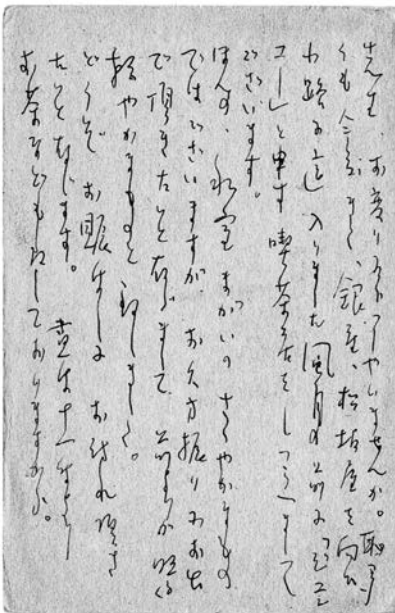
市外世田ヶ谷町代田三十九 生田葵様
山田順子

裏面（図版②）

先生、お変わりぬらつしやいませんか。恥多くも今度また、銀



図版 1：①生田葵宛山田順子葉書 表面



図版 2：①生田葵宛山田順子葉書 裏面

座、松坂屋を向ひ、小路に這入りました風月の前に「ジュンコー」と申す喫茶店をしつらへましてございます。
ほんの、和室まがいのさ、やかなものではございますが、お久方振りにお出で頂きたいと存じまして、前よりか明るく軽やかなものと致しました。
どうぞお賑はしにお訪れ頂きたいと存じます。昼は十一時よりお茶なども致しておりますから。

② 生田葵宛山田順子葉書（官製郵便葉書 昭和八年五月八日消印）

表面（図版 3）

市外世田谷町代田三十九 生田葵様
銀座五十五 ジュンコー 山田順子

裏面（図版 4）

生田先生

如何遊ばしました？

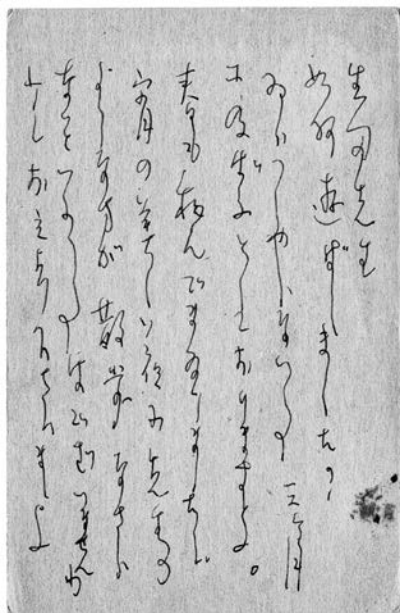
おらつしやらない事三ヶ月に及ぶとしておりますよ。

春も和んでまゐりましたし、宵の美しい夜に先生のような方が

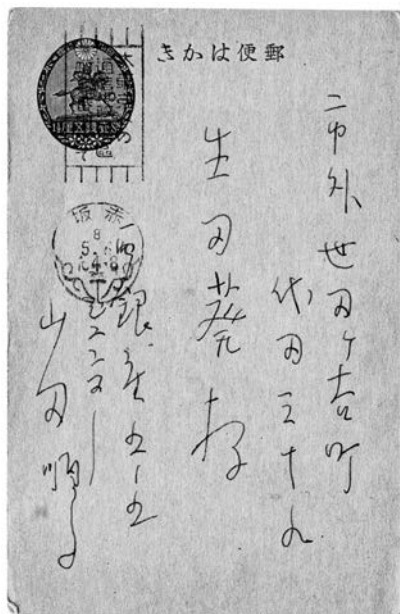
散歩なさらないといふ事はございませんわ

少しお立より下さひましよ

③ 今井欣三郎宛山田順子葉書（官製郵便葉書 昭和二十七年五月二十四日消印）



図版4：②生田葵宛山田順子葉書 裏面



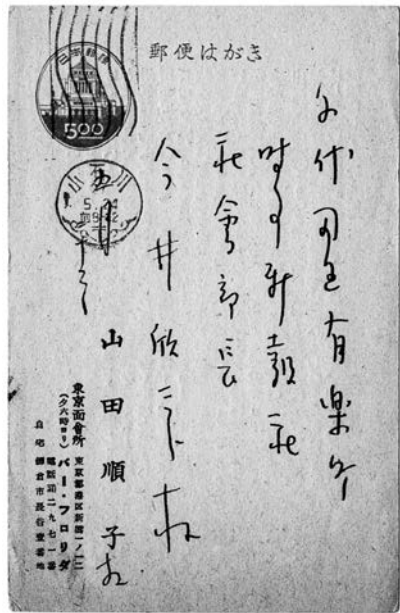
図版3：②生田葵宛山田順子葉書 表面

表面 (図版5)

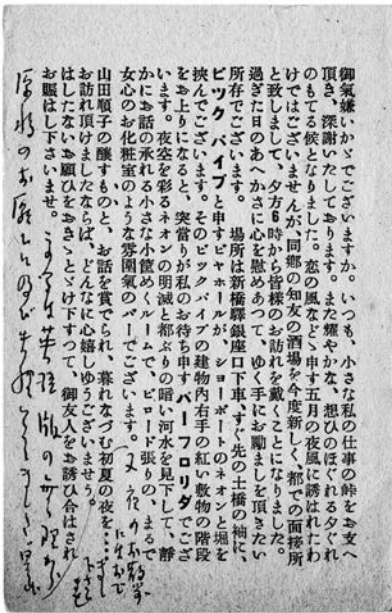
千代田区有楽町 時事新報社 社会部長 今井欣三郎様
五月二十二日 山田順子拝
東京面会所 (夕方六時ヨリ) 東京都港区新橋一ノ一二
バー・フロリダ
電話 (57) 二九七一番 自宅 鎌倉市長谷壹番地

裏面 (図版6)

御機嫌いかがでございますか。いつも、小さな私の仕事の峠をお支へ頂き、深謝いたしております。また耀やかな、想ひのほぐれる夕ぐれのもてる候となりました。恋の風など、申す五月の夜風に誘はれたわけではございませんが、同郷の知友の酒場を今度新しく、都での面接所と致しまして、夕方6時から皆様のお訪れを戴くことになりました。過ぎた日のあへかさに心を慰めあつて、ゆく手にお励ましを頂きたい所存でございます。場所は新橋駅銀座口下車、すぐ先の土橋の袖に、ビツクパイプと申すビヤホールが、シヨールボートのネオンと堀を挟んでございます。そのビツクパイプの建物内右手の紅い敷物の階段をお上りになると、突当りが私のお待ち申すバーフロリダでございます。夜空を彩るネオンの明滅と都ぶりの暗い河水を見下して、静かにお話の承れる小さな小筐めくルームで、ビロード張りの、まるで女心のお化粧室のような雰囲気のパールでございます。山田順子の醸すものと、お話を賞でられ、暮れなづむ初夏の夜



図版 5: ③今井欣三郎宛山田順子葉書 表面



図版 6: ③今井欣三郎宛山田順子葉書 裏面

を……お訪れ頂けたならば、どんなに心嬉しゅうございませう。
はしたないお願ひをおき、とゞけ下すつて、御友人をお誘ひ合はされお賑はし下さいませ。

(※以上印刷)

この間は菩提版の無理から原稿のお願ひに及び失礼いたしました。是非又夜のお散歩にはおでまし下さいませ

(※以上は手書きによる書き込み)

二 山田順子の伝記的空白を埋める

最初の二枚の葉書のうち一枚には消印がないが、一連の生田宛の書簡中に含まれていたようであるため、人づてあるいは何らかの機会に本人に直接手渡したのであろう。内容から見ても、この二枚は比較的近い時期に出されたと推定される。受取人の生田葵(別号・葵山)は巖谷小波門下の小説家・劇作家であるが、大正中期から一九四五年末に自死するまで世田谷区代田に居を構えており、カフェープランタンの常連であったほか、この葉書より後の時期に絶交することになったが永井荷風とさかんに銀座通いをしていたことで知られている。

そのような生田の姿は近松秋江「銀座街の四老人」(「読売新聞」一九三四年八月一〇、一一、一三日)にも描かれている。一九三四(昭和九)年の五月頃、秋江と徳田秋聲が銀座に出たところで永井荷風と生田葵に出くわし、立ち話のあと四人でコロンバンに入ってお茶を飲むことにすると、ちょうどそこに順子が女の

子（おそらく長女の淑子）を連れてきており、「荷風、葵山、僕（注・秋江）の三人でココアか何か飲みながら、話してゐる間、秋聲氏は順子と暫らく話してゐた」という。この時の会話の内容は不明だが、後述のように順子は葉書①②のカフェーに在籍していた時代であった。一方の秋聲はすでに『縮図』（一九四一年）のモデルとなる小石川白山芸者の小林政子と交際中であり、翌年から過去の順子事件を長篇化した『仮装人物』を連載開始することになる。この秋江のエッセイ内で生田と順子は特に言葉交わした形跡はないが、二枚の葉書の文面から判断する限り、両者は顔見知りであり、葉書②の文言から順子の店に顔を出したことがあったようだ。葉書①の文面には「お久方振りにお出で頂きたい」とあることから、それ以前の店にも訪れたことがあったのかもしれない。

山田順子は秋聲と別れた後に舞踊家の藤蔭（藤間）静枝から勝本清一郎を奪い取る形で同棲したが、これも長くは続かず、その勝本と別離後の生活については不明な点が多い。筆者が過去に順子について把握していたのは次のような程度であった。少し長いが拙著より引用する。

昭和三年一月に秋聲と別離後（実際には断続的に関係は続く）は、勝本清一郎との一年ほどの再び田端における同棲を経て、書店「街の本屋」（サン・ルーム）という喫茶店を併設（の経営をしながら長篇小説『地上の虹』（昭和五）婦人サロン」）を発表。しかしその後は文壇の表舞台より姿を消

し、昭和五年には銀座のカフェー「サイセリヤ」への勤務、翌年一月からは西銀座でバー「彼女」を経営（石原純が原阿佐緒のために開いた店を居抜きで引き受け、石原と共同経営したらしい）、同じ年の内に大阪のバー勤務など変転を重ねる。昭和七年から十年頃までは舞い戻った西銀座でバー「ジュンコ」を経営し、「JUNKO」という名の文芸機関誌を出していた。その後は阪神方面に移住し、昭和十一年の西田幾多郎門下の哲学者・小出次雄との出会い以降、西田哲学とキリスト教に傾倒して作風に宗教的色彩が強まり、自費出版で『神の火を盗んだ女』（紫書房、昭和一二）、『愛と受苦』（同、昭和一五）などを発表する。空襲を避けて九州および関西方面に疎開したが、昭和二十年三月の大阪空襲で行李七杯に詰まった原稿を全て失ったという。

戦後は東京に戻り、昭和二十四年より鎌倉の長谷寺の境内に居住、境内の工事小屋を「観音山荘」と名付け観音信仰普及を目指して服部良一作曲「観音音頭」の作詞や『私たちの観音様』（ゆき書房、昭和二五）を発表。この頃は専売公社中央研究所長も勤めた煙草博士の仁尾正義と一時期暮らしていた。（中略）文学への思いも断ち切れず、『女弟子』（ゆき書房版、昭和二九／あまとり出版社版、同三〇）にまとめられる秋聲との恋愛を暴露的に描いた作品群や、小説集『十七才の傾斜』（久保書店、昭和三六）などで再起を目指したが、昭和三十六年（一九六一）八月二十七日に東京世田谷の病院にて病没した（享年六〇）。最晩年は長谷寺を退去させられ

市内極楽寺（番地未詳）に吉村善旦という男性と暮らし、ゾルゲ事件の作品化を目指していたという。

（大木『徳田秋聲の昭和』二〇一六年、立教大学出版会）

この時点で順子の戦前の足取りとして推定できたことは、一九三〇（昭和五）年に銀座「サイセリヤ」への勤務、三一年一月に西銀座で「彼女」を開店、大阪行きを経て昭和七年から十年頃までは再び西銀座で別の店を経営していたらしいということである。

この間の居住地は順子が自費出版した書籍の発行場所などからある程度推測できるものの明確ではなく、関東と関西をいつどのようなタイミングで移動したかについてもわかっていない。ただし、藤蔭静枝に弟子入りさせた長女の淑子と次女・浄子^③を女手一つで育てる必要から、この時期のほとんどをカフェーやバーなどの飲食業に従事していたようだ。秋聲との交際中は婦人雑誌に複数の連載を持ち華々しく活動したが、以後は原稿依頼も減る一方で、短い作品やエッセイなどを女性誌を中心に細々と寄稿しているものの、とても原稿料では生活できなかったはずである。

ところで、いま引用した拙著の刊行後に近代都市史研究者の野口孝一氏による『銀座カフェー興亡史』（平凡社、二〇一八）が出版され、このカフェー時代の順子の様子がかなり明らかにになった。同書では震災後のカフェー文化全盛期に同所で働いた有名な女性として、歌人の原阿佐緒らと並んで順子が紹介されており、順子が一九三二（昭和七）年一月に木挽町四丁目五番地に出した

バー「街の灯」の久米正雄宛の開店挨拶状（ギンザのサエグサ文化事業室蔵）が掲載されている。

何もかもが走りの中で、引つ込んでゐますのも心細いし、寂しいこととございますので、今度はまた旧名エロスを改めバー『街の灯』を私どものサロンとして、忘れ勝ちな「気分」を皆様と御一緒に大事に育てさせて頂く事になりました。

是非、笑ひと涙との一領土、このバー『街の灯』をこそ朝霧の中に遠くうるむ心の故郷ともして、お思ひ出しくださるよう願ひ申し上げる次第でございます。

（野口孝一『銀座カフェー興亡史』より引用）

ここから、一九三二年一月時点で順子がいたのはバー「街の灯」^④であったことが判明したため、先の拙著の記述は訂正せねばならない。また同書には一九二一年に恋愛事件を起こした石原純（物理学者、歌人）がその相手である原阿佐緒と共同経営した「瀟々園」（正しくは「瀟々園 阿佐緒の家」）を「引き継いだ山田順子は『彼女』と名を改めたが、その筋からの干渉で『五月』と改名した（武野藤介『文士カッフェ行状記』『改造』昭和六年九月）」とも記されていて、「彼女」が「五月」という店名になったことも明らかになった。さらに同書はこの時期の順子の動向を次のように解説している。

(注・順子による) バーの開業がいつから始まったかわからないが、原阿佐緒の瀟々園を引き継いで「彼女」(「五月」)を始めたのは昭和五年頃のこと、生活の資を得るために始めたものと思われる。

昭和八年十月発行のタウン誌『Ginza 銀座』に「バージュンコー」の広告が載っていて、この時期順子は場所をかえて「バージュンコー」を出していたことがわかる。場所は西銀座五丁目角西銀座ビルで「マツタランブ後方二本目角二階」となっていて、杉浦非水の詩「銀座で拾った桜貝／それは順子の爪の色／ちよいと寄らんせ／ジュンコーへ」と似顔絵が添えられている。また、昭和九年八月発行の『あみ・ど・ぱり』にも広告を出している。帽子をかぶった女性を真ん中に「半生の苦悩を酒盃に溶いて われら順子は朗らかに笑ふデス! ジュンコーにて」の文字が添えられている。

ここからも拙著が「ジュンコ」としていた順子が西銀座で出していた店名が正しくは「ジュンコー」であることが判明するが、そのことは今回見つかった葉書①②からも裏付けられることになった。また葉書からその詳しい住所が「銀座五一五」であること、葉書②で生田葵に「三ヶ月」来店していないと書き送っていることから、遅くとも昭和八年の二月頃には店が存在していたことが推定される。

なお、野口著では順子が原阿佐緒の「瀟々園」を引き継いで「彼女」を始めたのは「昭和五年頃」となっているが、HP「稀

観本の世界」(<https://kikoubon.com/yamada-j.html>) にも「彼女」の開店時の案内状が公開されている。

御挨拶状

従来の酒場瀟々園を今度より後継者山田順子氏の手に委ねることに致しました。私は専ら自分の書齋での本来の仕事に従ふつもりですが、新らしく生れたバー「彼女」に対しても一層の御愛顧を得んことを、これ迄の縁故によつて祈り上げます。

石原純

由緒あるお店のことではありますし、私は御遠慮してゐたのでございます。しかし、石原先生の御誠意と、御人格と、御立場に御接し致しまして、今度よろこばしく、先生のお店なればこそ、私の気分をバー「彼女」の中で生かして見たいと存じたのでございます。何となく人恋しくそこはかたないお気持で、あすこに行つたならば夢の中の「彼」や「彼女」と逢へもする御気分のいたす折など、是非バー「彼女」をお想ひ下すつてお訪れ頂きたいと、お願いいたす次第でございます。薫りかな御気分をおそこね致さぬよう心を柔らかに、ふとお問になりましたお言葉に、女の血でふとお答へ出来ますがせいぐでございますが、一月十五日よりお待ちいたしたいと存じ上げます。

昭和六年一月

銀座西五丁目二

バー「彼女」

電話銀座（57） 一三一五番

山田順子

以上から、バー「彼女」の開店が一九三一（昭和六）年一月十五日であることと、住所が銀座西五丁目二であることがわかる。一九三〇年三月に開店した「瀟々園」は石原が別の女性と恋愛関係に入ったためわずか三ヶ月で閉店し、石原は千葉の霧日荘に移り、阿佐緒も息子とともに大坂へ移住し、結果として順子がその店を引き継ぐことになったのである。しかし、これも一年足らずで終わり、順子は翌年頭には「街の灯」に移ったようなのだ。

ところで詩人の橋爪健が『多喜二虐殺』（一九六二年、新潮社）に記している、一九三一（昭和六）年頃に順子が「銀座の裏通りにジュン・バアという酒場を開いていて、文壇の連中がよく集まった」として自身も「誰かにつれられて二三度飲みに行った」という店は、橋爪の記憶違いでバー「彼女」のことか、あるいは別の店のことであろうか。「ジュン・バア」という店名は「ジュンコー」を思わせるが、同書に登場する小林多喜二が小樽時代の友人に連れられて店にやってきて、潔癖ゆえに握手を求める順子に頑として応じなかったという挿話を考えると一九三三（昭和八）年以降とは考えられないので（多喜二は一九三二年春から地下活動に入るため）、やはり一九三一年頃であろう。順子がこの年にさらに別の店に移ったか、あるいは「五月」をさらに名称変

更した可能性もあるが現時点ではこれ以上は不明である。

秋聲門下で当時大阪毎日新聞嘱託（東京勤務）から平凡社に移った安成二郎も、正確な時期はわからないが銀座で秋聲と一穂父子、川崎長太郎と出会ったときに、秋聲が順子の「銀座裏のジュンバー」に行くことを三人に勧めたことを書き残している（『花万朵』同成社、一九七二年）。だとすれば、やはり「ジュン・バー」の時代があったのかもしれない。

なお順子が銀座の有名店「サイセリア」に在籍していた時代については、安藤更生『銀座細見』（一九三一年二月、春陽堂刊。引用は中公文庫版より）に、「最近には山田順子女史が来て、サービスには活躍している」との記述があり、同年五月「文藝春秋」附録に秋聲がゴシップ欄への「抗議」として順子の出ているサイセリアに行ったことはないと書いているので、一九三〇年から三一年までまたがっていた可能性が高く、前述のように三一年にはすでに「彼女」も開店しているの、掛け持ちであったのだろうか。このあたりの実態も少々つかみがたい。

やはり秋聲門下であった川崎長太郎によれば、勝本清一郎と別れた後の順子は「明治時代栄えた出版社で、二代目となっても老舗としていまだに命脈保っている、その社長の世話をうける女と変り、日本橋の裏通りにある小さなバーのママに納まった」が、そのバーも「尻を落ちつけることみつき足らずで、今度は銀座の『サイセリヤ』という、その頃派手に売っていたバーの女給となつて」、「順子さんの名をうたった、披露目の広告同前のものが、都下一流の新聞紙に出た」と記している（『ある女流作家の

一生」『忍び草』一九七二年、中央公論社）。秋聲の『仮装人物』にある通り、順子が開いていた書店は渋谷にあったので、「サイセリヤ」の前に日本橋のバー時代もあったようだ。ここまで見ただけでもわかるように、この種の店では「看板女給」であつても一カ所に落ち着くことはまれであり、様々な事情で同様の店を転々としたのであろう。また店自体の入れ替わりも激しく、たとえ高い家賃を払って出店したとしても過当競争の業界で成功するのはかなり難しかったことがうかがわれる。

順子の店に三度行ったことがあるという秋聲門下の榊山潤によれば、銀座裏にある店は「はやっていた」とのことと、「この好色な美女を、何とかしたい客が群がったのだ」(『馬込文士村』一九七〇年、東都書房)と榊山は書いている。なお榊山の最初の妻は大森山王の二階屋で洋酒屋を開いており、この種の店がはやっていても儲からない理由の一つは、「客はくるが、貸しが多くてなかなか現金が入らない」からであるという。つまり「ツケ」で呑む客が多い商売上の特性で、うまくその借金を回収できることこそが「おねえさん」(マダム)の腕であるとも榊山は記している。順子の店のケースがどうだったのかはわからないが、一時繁盛したとしても安定した経営を続けることは至難であるのだ(これは現代でも同様であろう)。

その中で、山田順子が自身の名を冠していた「ジュンコー」が、一九三五(昭和一〇)年あたりまで比較的長く存続していたらしいことは、順子の同郷のジャーナリスト・木村与之介が書いた「山田順子」(『あきた』一九六六年九月)に「順子は昭和十年

のころ、西銀座にバー・ジュンコーという小さな店をもっていた」とあり、その機関誌「ジュンコー」の書影が掲げられていることからわかる。前述の榊山潤の夫人・雪は「先生のところに私が伺うようになった頃は、銀座に、バー・ジュンコーという店を開いていまして、杉浦非水や竹久夢二が描いた順子の色紙が飾っており、もう四〇を越えたかと思われるのに、実に美しい顔で、少し秋田なまりのある独特のしゃべり方でした。ハルビンや大連など旧満洲に帰る友達と一夜その酒場で別れの会をしました。これは私のおごりよ、といってジンフィーズか何かもって来てくれましたが、帰りにはちゃんとその分代価を払われ、中々ちゃっかりしているんだと友達と笑ったことがありました。順子さんもさることながら、その頃二〇位の娘さんは、とても美しい人でした」と書いている。順子は一九〇一年生まれなのでこれが一九三五年頃としてもまだ四〇歳は超えていない。この文献には雪夫人が榊山と結婚した頃、秋聲は「通称モナリザと呼ばれていた白山の女の人がおそばにいました」(小林政子のこと)とあるので、秋聲が政子と親しくなった一九三二年以降の話であることは間違いなく、順子の店に行ったのはもう少し後の時代かも知れないが、少なくとも一九三七年以降ではないだろう。

三 順子の店はどこにあったのか

なお、今回新たに③の葉書から、戦後の順子が「バー・フロリダ」という店に出ていたことも判明した。宛先人の今井欣三郎については野上記念法政大学能楽研究所発行の「能楽研究 能楽研

究所紀要」第一一〇号（一九八六年三月）の西野春雄による「能界展望（昭和59年）」内の物故者欄に次のような記事がある。

今井欣三郎氏

能楽評論家。本名、今井欣真。五九年三月一〇日、肺炎のため、東京都渋谷区の代々木病院で死去。享年八一歳。明治三十七年生。東京都出身。時事新報社記者・社会部長等を歴任。戦後はサンケイ新聞社に移り東京本社編集局次長。新聞の能評欄を担当。昭和二十一年「時事名曲選」を企画、啓蒙にも尽力した。『観世』『芸能』等に予評・時評の記事を執筆。芸能全般に造詣が深く愛着も強かった。著書に『欣三郎小文集』（昭和五〇年、私家版）等がある。

ここから、今井は能楽評論家で当時は新聞記者であった人物ということがわかる。記事では産経新聞に移ったとあるが、戦後に復活した時事新報社は業績不振で一九五〇年より産経新聞と提携関係となり、一九五五年に産経と合同して紙名を「産経時事」と改題しているので、このときそのまま産経に移籍したのである。当時の今井の年齢は四十代の後半で、時事新報の場所柄、戦前からの付き合いがあったのかもしれない。なお葉書の手書き部分から、何か観音信仰に関わる原稿を今井に書いてもらった可能性もある。当時の順子は鎌倉の長谷寺境内の小屋に居住し観音信仰普及を第一に活動しつつ、もう一方で『女弟子』（前掲）にまとまる作品や雑文を文芸誌やカストリ雑誌などに発表していた。

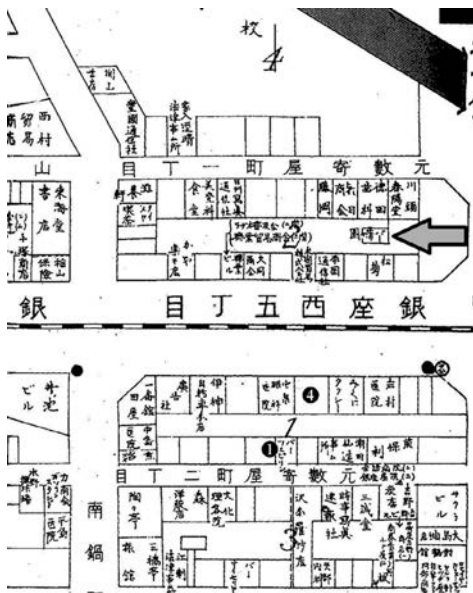
文面から同郷の知人が出店したとあるので、秋田出身の人物がオーナーだったのだろう。

なお、この店「バー・フロリダ」が、戦前は赤坂溜池にあり戦後は新橋に移転した名門ダンスホール「フロリダ」（一九二九年開場）とどのような関係にあるのかは定かでない。新橋フロリダがあった場所は新橋第一ホテル（現第一ホテル東京、港区新橋一・二・六）の隣なので場所的には少し外れている（詳しくは後述）。同じ資本が出した店か、あるいはフロリダの名称は戦後あちこちで使われていたようなので、あやかって名付けただけかもしれない。

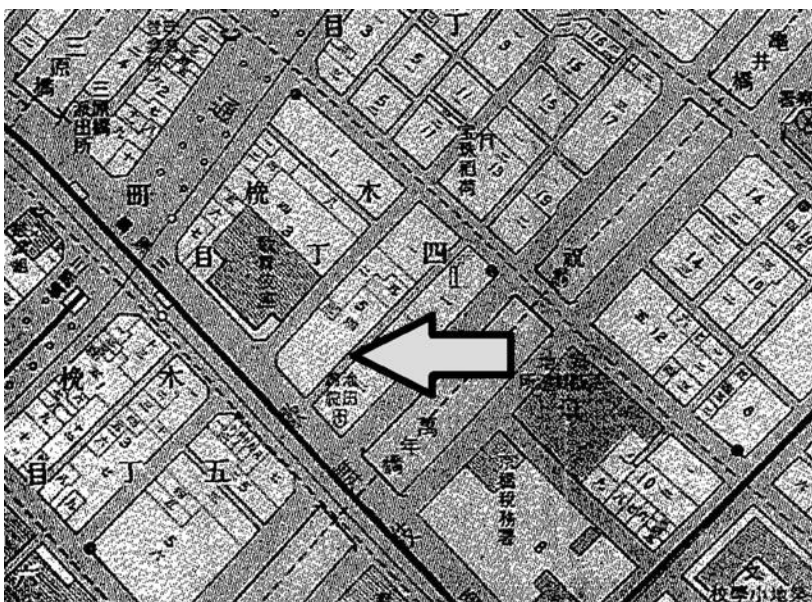
ともあれ、順子はこの時代も戦前と同様の業種に関わっていたということである。「東京面会所」とあるので、場所を借りただけで積極的な関わり方ではなかったようだが、はたして昔の名前「山田順子」はどの程度通用したのであるか。むしろ、この時のバー勤務は、文壇への再起のための人脈を求めている性格が強かったのではなからうか。先述のように戦後の順子は鎌倉の長谷寺の一角に居住しながら、日本専売公社中央研究所の所長で「たばこベース」を発明したことで知られる仁尾正義や、川崎長太郎の小田原の家を順子とともに訪問してきた「人品の卑しくない青年」（前掲「ある女流作家の一生」）など複数の男性の援助を受けつつ、『女弟子』以外にいくつかの文芸書を刊行していた。死の床でも「七百枚に余る自作の長篇小説の原稿」を推敲していたという順子（同前）は、最後まで小説の道で成功するという悲願を手放さなかったのである。ちなみに安成二郎（前掲書）によ

れば、勝本清一郎の弟・英治が鎌倉に住んでおり、晩年の順子と交流して二千万の大金まで貸していたという。以上は直接本筋とは関係ないが、文献を読み直す中で気づいたのでここに書き残しておく。¹⁰⁾

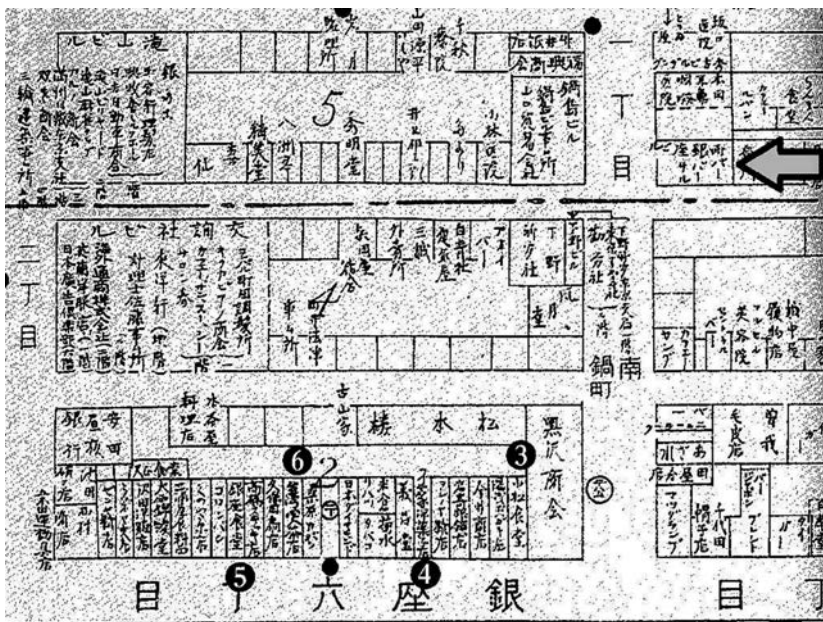
ここまで確認してきた順子が勤務した店舗の場所を、『銀座歴史散歩地図 明治大正昭和』（草思社、二〇一五年）を用いて現在の場所と照らし合わせてみた。同書収録の一九三〇（昭和五）年の「復興大銀座地図」に「瀟々園」の名前が見つかったので、昭和六年一月開店の「彼女」はこの場所であり、また現在の銀座五丁目二―一東急プラザ付近と推定される（地図1）。



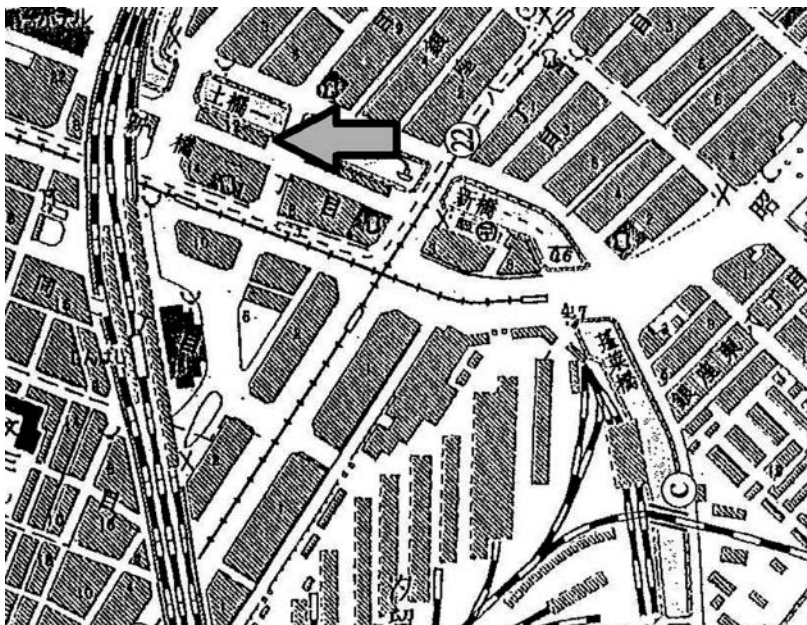
地図1：矢印が「彼女」の場所（推定）。
「復興大銀座地図」（1930年）より



地図2：矢印が「街の灯」の場所（推定）。「大東京区分図三十五区之内京橋区詳細図」（1937年）より



地図3：矢印が「ジュンコー」の場所（推定）。「復興大銀座地図」（1930年）より



地図4：矢印が「フロリダ」の場所（推定）。「新橋1万分1地形図」（1958年）より

同じく一九三二（昭和七）年一月開店の「街の灯」は、詳しくはわからないが、番地から判断して歌舞伎座裏の現銀座四丁目一三付近と推定される（地図2）。

次に一九三三（昭和八）年までに開店した「ジュンコー」は、場所が「西銀座五丁目角西銀座ビルで『マツダランプ後方二本目角二階』とあったが、同じく一九三〇年の「復興大銀座地図」に「マツダランプ」の奥に「西銀座ビル」を発見することができた。これは現在の銀座五丁目五・九付近にあたり、おそらく当時の地図中では「バー バール」となっている場所を居抜きしたのではなからうか（地図3）。

最後に、一九五二（昭和二七）年より順子が店に出た「バー・フロリダ」の場所は、これは近い時代の詳細図がなかったので少し後の時代の地図だが、葉書の文面に「新橋駅銀座口下車、すぐ先の土橋の袖」とあるので、現在も同じ番地の新橋一・一二付近にあたる場所と推定される（地図4）。橋が架かっていた汐留川はのち東京オリンピックのために埋め立てられたが、現在も「土橋」の名は交差点として残っている。

四 「女史」たちのカフェー

以上のように戦前・戦後にまたがってカフェーやバーを転々とした順子だが、「彼女」に出た一九三一（昭和六）年の段階ですでにカフェー経営で有名であったことは、同年二月十六日「読売新聞」夕刊の記事「『先生』のカフェー／詩」を飲ませ『名』を喰はす／顔のシワを延していとも桃色に／エロ戦線に躍る『女

史』群」に取り上げられていることからわかる。「女史」群の街頭進出」による「インチキ・カフェー」の流行を報じたこの記事は、順子が「サイセリヤのマネキンから石原純博士のバー瀟々園を譲り受けて『バー彼女』に女給たちから『先生』と云はせて納ま」っているとして、渡瀬淳子の「ジュンバー」、原阿佐緒、花柳はるみ、丹稲子、小林幸子らの店の中で順子に最も文字数を割いて紹介している。さらに同年五月の「オール読物」掲載の「蒙御免文壇カフェー常連番附」にも順子は登場しており、この番付で順子は原阿佐緒と丹いね子とともに「勧進元」と割り当てられている。ちなみに「行事」はブランタンの経営者である松山省三で、「呼出」は燕楽軒で女給をしていたことがある宇野千代、「横綱」が菊池寛と三上於菟吉、「大関」が岡田三郎と永井荷風、「関脇」が酒井真人と広津和郎、「小結」が中村武羅夫と吉井勇で、「前頭」に久米正雄、井伏鱒二、長田幹彦、谷崎精二、北原白秋、川口松太郎、樋崎勤、牧野信一、永井龍男らと並んで、徳田秋聲と、順子の二通の葉書の受取人であった生田葵の名前も見られる。

当時カフェーや類似の飲食業で女給として働いたことのある女性作家は、先の記事で名前が挙がった宇野千代以外に、林芙美子、佐多稲子、平林たい子らが知られている。ただし、これらの人々は無名の下積み時代に店に出たのに対し、山田順子や原阿佐緒ら「女史」のカフェーとして紹介された女性たちは、一度文壇で有名になってからその名前を売りにして勤務したことに違いがある。野口孝一『銀座カフェー興亡史』（前掲）によれば、一九

二〇（大正九）年に銀座南金六町西側の共同火災保険会社の隣に「カフェー・ナシヨナル」を開いた、桂太郎の妾であった安藤照（芸妓・お鯉）が「歌人、小説家、女優、芸妓などがその知名度を生かしてカフェー、バーの経営者や看板女給になる場合」の走りであったという。

同書には震災後に女給がサービスの中心となる中で話題になった店が紹介されており、先ほどの記事と一部重複するが、「原阿佐緒の「瀟々園」、山田順子の「ジュン・バー」、「街の灯」、新派女優渡瀬淳子の「カフェー・ジュン」、断髪の新劇女優花柳はるみの「サンチャゴ」、新派女優水谷八重子の「メーゾン・ヤエ」、映画女優佐々木清野の「バー・キヨノ」（花柳はるみの「サンチャゴ」を買い取って出す）、映画女優八雲恵美子の「バー・スワロウ」、「タット」、一色瑠璃子（勝代）の「ランチェラ」、新劇女優滝蓮子の「バー・ムーラン・ルージュ」など」である。他にも本文中では阿佐緒や順子が一時女給として出ていた元数寄屋橋二丁目（銀座五丁目）の「サイセリヤ」で大川京子という看板女給が最盛期はチップだけで月収五八〇円で日本一のチップ取りと噂され（二〇〇〇円という説もあったそう）、一九二九年に交詢社ビルに開店した「サロン春」^①が話題性の多い美人女給を置く店として知られており、その「サロン春」に移籍した原阿佐緒にさらに大阪のカフェー「日輪」が目を付けて、月に四日だけ飛行機で来阪させて運賃も滞在費も全て同店が負担したという、客を取れる女給を巡る狂騒ぶりも紹介されている。経営する側から見れば生き馬の目を抜くような業界で、なんとか生き残るための客寄

せ的存在が求められたのであろうし、彼女たちの側から見れば女性性が一人で都市の中で自活するにはカフェーしかなかったということであろう。

そのような銀座の街を長年眺めてきた安藤更正（前掲『銀座細見』）は「女給は解放期に向っている日本女性にとつての一つの重要な職業」と書いているが、それは「昔は女が自分の力で金を得ようとすれば、自分の体売るより仕方がなかった」からであり、「タイピスト、ショップガール、女車掌」などは働ける年齢が限られていて技術もいるが、女給はいつでも誰でも、そして若くても歳をとつても働ける「一種の自由労働者」であったからであるという。もちろん、参入のハードルが低いゆえに高い教育を受けていない地方出身の女性が多数従事することになり、娼妓のように直接「体売る」わけではなくても多くの若い女性が性的に搾取されながら働いていたのだが、たしかに人気女給になる、あるいはそのような店を経営することは、資本を持たない女性にとって経済的成功を得るための一つの道ではあった。

原阿佐緒については「病身の吾にも出来る職業として」（短歌の一節より）^②この商売を選択しようだが、順子についてはもう少し積極的な理由もうかがえる。順子はまだ小樽の増川弁護士の子だった時代に作家を夢見て上京し、見聞を広げる目的で震災後に神楽坂に移転したプランタンの客分格の女給として出ていた一時期があった。^③つまり、かつての古き良きカフェー文化への憧憬があったということである。順子が一九三一年に書いたエッセイ「カフェー偶感」（三月「近代生活」）は当時ドイツへ留学した順

子の弟からの書簡「誰もが名前や肩書きを名のるような事はない」「ベルリンのカフェの「周囲にテ、ラウ、日本人などの、とても持たぬよさ」の紹介から始まっており、「主張や、観念や外部からくつつけたエロや、グロやそんなものなしに、心の地で、心の誓ひをたゞよはせて、ふと「答へ」をしてくれる人のゐる場所」を「日本、東京のカフェにも見出でたい願ひを捨て兼ねる」とカフェーの理想を語っている。つまり、まさに松山省三がプラタンの目指した文化人が集まるサロンの空間を理想としていたということだ。しかしそれは震災以前のカフェーの姿であり、大阪のユニオンや美人座や日輪が進出して以後「銀座は今や大阪カフェ、大阪娘、大阪エロの洪水」(安藤更正『銀座細見』)となった中で、前記のエッセイ中で順子自身が「現に辿りつ、ある時勢を背景としては、狂夢に値ひする事として大方から笑はれるのかも知れない」と書くように、昭和の東京でその夢の実現は困難であった。

だが先述のように、順子は「ジュンコー」の時代に機関誌を発行して曲がりなりにも文化的な活動を継続していたのであり、実情はどうあれカフェーに一つの理想を抱きつつ、地道にその実践を行っていたのである。原阿佐緒が「歌よみの阿佐緒は遂に忘れむか酒場女とのみ知らるはかなし」と詠み、華やかな歌壇から「社会の底辺に落ちていった」(小野勝美『原阿佐緒の生涯』古川書房、一九七四年)と後年書かれたように、カフェー時代の順子についても落魄ばかりが強調されるが、それは必ずしも当人の思いではなく、たとえ夜の街であっても「文学」の周縁で生き

ることの喜びや、またそこで無数の人々が交流する文化の場を作るという意思が存在していたと考えられるのだ。

おわりに

東京や大阪など都市部のカフェーに集った客層は、当初は文士、画家、新聞記者、大学生などが中心であったのが、第一次世界大戦による好景気の中で次第にサラリーマンなど中間層の人々や商店主などにも広がっていった。カフェーを舞台にした小説として広津和郎「女給」や林芙美子「放浪記」などがあるが、そのように文士や記者などがその世界を様々に文章化することでカフェーという場所はさらに人々の関心と呼ぶようになった(以上、『銀座カフェー興亡史』)。山田順子は秋聲との恋愛事件以前から竹久夢二との恋愛などでたびたび新聞や女性雑誌を賑わせており、順子のような世間でよく知られた女性は、文壇人や出版人でなくとも実際に一目見てみたいと思わせたのであろう。

日比嘉高「フライヴァシーの誕生 モデル小説のトラブル史」(二〇二〇年、新曜社)は、大正後期以降にモデル小説が小説家やその周囲の存在だけでなく、映画俳優・女優やスポーツ選手にまで広がってゆく状況を「講談倶楽部」に代表される「実話」ものの流行と併せて紹介している。そこで用いられた「実話」とは、小田光雄によれば「アメリカで出されていた犯罪実話誌などを総称する『Confidential』の訳語と考えられ、昭和初期にエロ・グロ・ナンセンスとともに使われるようになったチーム」で、菊池寛がその提唱者であるとされる。小田がその流行の象徴

とする平凡社の『明治大正実話全集』の第一一巻「変態恋愛実話」（直木三十五編）には、「藤原義江と秋子」「原阿佐緒」「神近市子」「柳原燐子」（白蓮）「樋口一葉」らと並んで順子を取り上げた章が存在する。すなわち関東大震災以降の大衆文化の爛熟の中で、著名な個人のプライバシーが市場価値を持つ時代になっており、中でも恋愛事件を起こした原阿佐緒と山田順子という文学者が、代表的存在として注目されたということだ。「女史」たちのカフェーはそのような社会状況の中で成立した現象だったのである。

筆者はこれまで文学資料の価値の変遷や作家の居宅保存、戦前戦後の文学館運動の掘り起こしなどから、社会の中でどのように「文学」の価値が上昇し、作家という存在が単に作品を読まれるという行為を超えて社会的に受容されてゆく様相を検証してきた。¹⁷冒頭にも述べたように、本稿が問題にしてきたような所謂「カフェー文化」は、これまでも都市風俗研究の中で重要性を見いだされてきたが、文学研究の範疇でも一定の価値を持つ可能性があるのではなからうか。つまり、そのように文学者のイメージが文壇という狭い社会を越えて流通した時代を考える材料となり得るということだ。山田順子という女性作家はまさに文壇とその外部をつなぐ存在であり、本稿が紹介した葉書もまたその一つの物証と位置づけられるのである。

注

（1） なお筆者は後述の研究書に収録した秋聲と順子に関する複数

の論文を発表しているほか、順子の作品を収集し伝記と著作目録とともに収録した『下萌ゆる草・オレンジエート 山田順子作品集』（二〇一二年、龜鳴屋）を編んでいる。

（2） これらは最初に店名に「カフェー」を冠した松山省三の「カフェープランタン」（一九一一年開店）に起源を持つコーヒーや料理を出す店であったのが、次第に飲酒と女給がサービスの中心となつてゆき、のち一九二九（昭和四年）年に「カフェ・バー等取締要項」で規制され、さらに一九三三年に「特殊飲食店取締規則」で「特殊喫茶」と指定された業態を指す。「バー」は洋酒を出す業態としてカフェーから派生したもののだが、その区別は曖昧で一般にこれらを併せて「カフェー文化」と総称されることが多いので、本稿でも同様に取り扱うこととする。

（3） もう一人の男子は郷里に預けていたようだ。

（4） なお郷土天文館「タイムドーム明石」第14回特別展「ふたつの銀座復興―文明開化とモダン文化」で展示された同店の挨拶状には「泣いても笑っても、解つてみたところで、さてどうにもならない、どう仕様のないお気持ちをおもてあましの折には、ぜひ山田順子をお忘れなく」との文言があったことが、永峰好美氏のHP内の二〇一二年・一一・一六付記事「銀座で花開いたカフェー文化」で紹介されている。（<http://www.nagamine-yoshimi.com/arch/2012/11/16/040000.shm1> 一〇二一〇・九・一六閲覧）

（5） 野口著では「銀座五丁目一番地」となっていた。なおこの資

料については拙著『徳田秋聲の昭和』（前掲）で既に紹介したことがある。

- (6) 後述の渡瀬淳子の「ジュンバー」と混同している可能性もあるが、以上のようにそれなりに詳しい証言が二つあるので判断を保留しておきたい。

- (7) 榊山雪「馬込文士村の人々と私」（「大田区郷土博物館紀要第四号 一九九三年度」一九九四年三月）

- (8) 安成二郎（前掲書）は順子が「流るるままに」を刊行した聚芳閣にいた人物の情報として「年を四つサバをよんで」いたと書いてあるが、筆者が遺族に聞いて把握している戸籍上の生年是一九〇一年で間違いないようである。

- (9) 葉書の「鎌倉市長谷壹番地」がその住所であるが、これはほぼ不法占拠だったと言われている。

- (10) なお同書には、安成が順子の長女・淑子を秋聲の頼みで藤蔭静枝に斡旋して弟子入りさせたことが書簡とともに紹介されている。安成は原阿佐緒と石原純とも知り合いで、石原の将棋友達であったほか、『銀座細見』の著者・安藤更正とも友人であった。以上は伊多波英夫『安成貞雄を祖先とすドキュメント・安成家の兄妹』（無明舎出版、二〇〇五年）にある記述で、安成の経歴については本書を参照した。

- (11) ここは他店とは一線を画した高踏路線で美術部を作って藤田嗣治を招いたり、来日したチャップリンが立ち寄ったことでも知られる。

- (12) なお阿佐緒はその後、大坂で「ニューヨークサロン」「あさ

をの家」で働いており、順子が関西に行ったのもそのような大阪のカフェー市場があったからなのであろう。

- (13) 歌の全体は「病身の吾にも出来る職業として捨てがたく思ふかなしき吾なる」（「黒い扉」「現代短歌全集第一八巻」）。他にも阿佐緒には「女は若くあらねば職業を得られずとふ社会に吾も老ゆ」という歌もある。

- (14) 浅見淵も順子を初めて見たのは神楽坂移転後のプランタンだったと書いている（『昭和文壇側面史』、一九六八年、講談社）。

- (15) 同書の第四章「破船事件と実話・ゴシップの時代」および第五章「のぞき見する大衆」。

- (16) 以上「古本夜話九八一 菊池寛、平凡社『明治大正実話全集』、永松浅造」より（<https://odamitsu.hatenablog.com/entry/2020/01/08/000000>）。菊池寛の「文藝春秋」は昭和三年一〇月号から誌面で「実話」を募集していた。

- (17) 「文学の『記憶装置』としての『家』——前文学館運動として見る子規庵と漱石山房」（二〇一六年一月「日本文学」）、「『売買される』文学——戦前の文学展示と近代文学資料の価値形成についての試論」（二〇一六年三月「山梨大学国語・国文と国語教育」）、「十五年戦争下の〈文学館運動〉——「文芸懇話会」と「遊就館」、そして島崎藤村」（二〇一五年五月「日本近代文学」）など。

※本稿は筆者が講師を務めた八木書店近代文学特別講座「活字

を「はみだすもの」第十九回（二〇一九年十一月三〇日）の「徳田秋聲と山田順子——生田葵苑葉書から見る順子のその後」の内容が元になっているが、原稿化にあたって追加の調査を行い大幅に増補した。当初の講座の際に資料調査にご協力いただいた八木書店古書部の小沼貴裕氏に心より感謝を申し上げます。

（おおき・しもん 本学特任教授）